全海運所属組合の横顔

連載　第６回

九州地方海運組合連合会

その 15　八幡海運組合

【組合の概要】

事　務　局　〒 805-0009
福岡県北九州市八幡東区宮田町 2-18
八幡船舶協業組合ビル２階
電話　093-662-2560　FAX 093-661-4561
JR 鹿児島本線『枝光』駅下車、徒歩７分

理　事　長　三原　啓嗣　新広海運㈱代表取締役社長

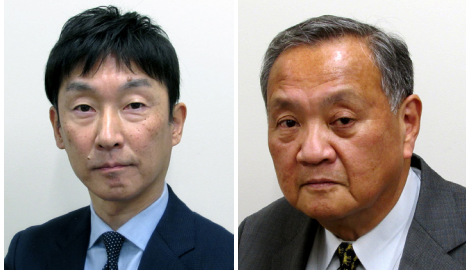
事務局長　下瀬　守

事務局員数　男子１名（事務長含む）

組合員数（休業除く）

運送事業者	２社	
貸渡事業者	６社	
合　計	８社	

所属船腹量　一般貨物船　12 隻　28,622 重量ﾄﾝ



三原理事長（左）と下瀬事務長

事務局のある北九州市八幡東区宮田町

八幡海運組合の概要

八幡製鐵所の鋼材輸送が主力

八幡製鉄所（現日本製鉄㈱九州製鉄所八幡地区）は明治 34 年（1901）に操業を開始した。明治政府の殖産興業のスローガンの元、日清戦争に勝利した軍備増強と産業資材用鉄鋼生産の増大を図るため明治 28 年（1895）に製鉄事業調査会を設置し、翌 29 年（1896）に第９回帝国議会で官営製鉄所設立の「創立案」の予算が承認され、全国 13 カ所の候補地が選定され、その後、①呉（広島県）②大里（北九州市門司区）③板植（北九州市小倉北区）④八幡（北九州市八幡東区）の４カ所に絞り込まれた。最終候補地の選定については、❶広大な建設予定地が安価で得られること ❷海上、陸上の交通の便がよいこと ❸原料と燃料が得やすいこと、という条件があったが、八幡村２代目村長の芳賀種義及び筑豊炭田創業者で安田財閥を築いた松本健次郎らの誘致活動により、八幡村に決定となった。要因としては、㋐芳賀村長の働きかけにより 100 万㎡のもの広大な土地を地価の半価で提供される ㋑松本とその兄安川敬一郎らにより洞海湾が整備される ㋒遠賀川からの用水の確保される ㋓筑豊炭田からの石炭の確保できる、などが挙げられ、明治 30 年（1897）２月に「官営製鉄所は八幡村に置く」と公布された。建設費は、日清戦争で得た賠償金で賄われている。

八幡船舶協業組合ビル

八幡製鐵所の東田第１高炉で火入れされたのは明治

34年（1901）だったが、当初はコークス炉がなく、銑鉄の生産が予定の半分程度にとどまり、計画した操業成績をあげることができなかったため赤字が膨れ上がり、翌明治35年（1902）に操業を停止。政府は調査委員会の検討をもとに、コークス炉を建設し、原料も精選する方針が立てた。その後、明治37年（1904）2月に日露戦争が勃発し、鉄の需要が急激に増えたことから、政府はコークス炉の完成を受けて製鐵所の操業再開を決め、4月に第2次火入れされたが、僅か17日間で操業停止に追い込まれたことから、炉内をより高温に保つため、高炉の形状を改め、操業方法も改善する高炉が改造されて7月に第3次火入れ。これが成功し、その後は順調に操業を進めて、多くの銑鉄を得ることができた。そして、翌年の2月には以前から建設が進められていた東田第2高炉が火入れされ、銑鉄の生産量がほぼ2倍になった。

事務局

日露戦争が終結すると民間から鉄の需要が増え、技術革新、重工業の発展や第1次世界大戦で大幅に増えた鉄鋼需要に応えた拡張工事進められ、昭和2年（1927）には年間銑鉄生産量年100万㌧計画が立案され、海に築く製鉄所の先駆けとなった洞岡高炉群のが昭和18年（1933）完成し、当時の国内需要の7～8割を八幡製鐵所が賄うようになった。

第2次世界大戦後の日本製鉄㈱八幡製鉄所は、昭和25年（1950）4月1日に八幡製鉄㈱八幡製鉄所に、45年（1970）4月新日本製鉄㈱八幡製鉄所となったが、中小内航海運業者は、24年（1949）から31年（1956）頃にかけ、それぞれ八幡製鉄所と個別の海上輸送契約を結んでいた。当時、機帆船の鋼船化が進む中で中小内航海運業者は、昭和32年（1957）の小型船海運組合法、小型船海運業法の施行を機に、共存共栄のために使用船舶の統合と配船の一元化を進め、業務の合理化・船主経済の安定化を図るため、34年（1959）に八幡船舶輸送協同組合を設立した。これが母体となり八幡製鉄所と運送契約を締結していた製鉄原料輸送、製品輸送の業者を含め15社、21隻、8,356重量㌧をもって八幡海運組合が設立されたのだった。そして、八幡船舶輸送協同組合は、昭和44年（1969）に八幡船舶協業組合に改組され、内航海運業法に基づく運送事業者となり、八幡製鐵所と元請運送契約を締結したのだった。八幡船舶協業組合は昭和53年（1978）、100％子会社の八幡船舶㈱を設立して運送業を移管。その後、八幡船舶㈱は平成13年（2001）日鉄物流と合併し現在に至っている。

八幡地区の中小内航海運業者は元々、船どころというよりも、八幡製鉄所を始めとする荷主のニーズによって形成されていた。機帆船時代にも中国地区船主、特に倉橋地区船主筋では日本製鉄㈱八幡製鉄所が操業を開始した昭和9年（1934）から数年後に、石炭運搬船の約2割が八幡製鉄所出荷の鋼材及び入荷の原燃料（石炭、石灰石）の輸送に当たっており、八幡製鉄所との海上輸送面における関係はかなり早い時期から存在していた。

八幡海運組合の事務所は設立以来、北九州工業地帯の中核をなす八幡製鉄所（現日本製鐵㈱九州製鉄所八幡地区）構内にあったが、昭和49年（1974）に八幡船舶協業組合が、八幡製鉄所本事務所に隣接した場所に自社ビルを建設したのに伴い、

八幡海運組合の事業規模の推移

年度	事業者	隻数	総㌧数	重量㌧数
昭和38年（1963）	15	26		8,356
47年（1972）	31	47		46,522
56年（1981）	25	41		57,513
平成 5年（1993）	21	34	25,082	50,087
10年（1998）	19	26	22,321	35,304
27年（2015）	10	15	30,992	29,020
29年（2017）	10	14	30,716	45,287
30年（2018）	8	12	30,395	28,622
令和 4年（2022）	8	12	30,395	28,622

同ビル内に移転した。八幡地区の中小内航海運業者はまさに、八幡製鉄所とともに発展してきたといってよい。

ちなみに、同組合の組合員数及び所属船舶隻数の概要を年度別にみると前頁表の通りだが、設立当時に比べ組合員数は昭和47年（1972）、船腹量は56年（1981）をピークに逐次増加を示し、以降は減少をみせている。

八幡海運組合を設立した昭和38年（1963）7月当時の初代理事長は長友雅哉（日鉄八幡港運㈱＝現日鉄物流八幡㈱＝社長／昭和38年～45年）で、2代目理事長が今域良一（八幡船舶協業組合理事長／昭和45年～62年）、3代目理事長が古賀善弥（八幡船舶㈱社長／昭和62年～平成3年）、4代目理事長が堀江隆三（堀江船舶㈱社長／平成3年～17年）、5代目理事長が堀江光正（堀江船舶㈱常務取締役／平成17年～22年）。現理事長の三原啓嗣は、平成22年に就任した6代目。

組合の主な事業内容は、内航海運業法の許認可申請手続きの指導、船腹調整規程の建造等承認手続きの指導、新造貨物船の省エネ船型・省エネ設備などの指導である。

八幡海運組合の事業として内航海運史にも残るのは、自主共同係船の実施である。昭和48年（1973）の第1次オイルショックにより、50年（1975）8月から新日鉄の鋼材出荷は半減。新日鉄元請8社所属船の約50％を占め、元請シェアNo.1だった八幡船舶協業組合は、これに伴う過剰船腹対策として、所属船舶を新日鉄の月別出荷量に対応する提供船（稼働船）と自己調整船（停船）に区分し、月別に交互に配船調整を実施した。稼働船から運賃の一定率を徴収して、調整船に対し停船補償費を支払うというもので、この相互措置を4年間継続実施した。これによって、八幡海運組合加入業者には当時、不況による倒産が1社も出なかったが、これは内航不況対策が成功を収めたケースとして、内航業界及び関係官庁から高い評価を得ている。

八幡海運組合の下瀬理事長は八幡船舶㈱の出身で、東京本社の営業部にも勤務していたことがある。

八幡地区の名所旧跡

尾倉（おぐら）村、大蔵（おおくら）村、枝光（えだみつ）村が合併して、八幡（やはた）村が誕生したのは、明治22年（1889）4月の市町村制施行によるものだった。「やはた」と名付けられた由来は、この3つの村とも産土神様（うぶすなかみさま）として八幡神社を祀っていたことからもといわれている。

八幡村は明治33年（1900）に八幡町となり、翌34年（1901）に官営八幡製鉄所の創業とともに全国から人が流れ込むようになり、目覚ましい発展を遂げた。大正6年（1917）には市政施行により、八幡市が誕生。現在の八幡東区役所正面入口付近の石垣や階段は旧八幡市庁舎の面影を残している。区役所の敷地内には、旧八幡市の市歌碑や大正11年（1922）に一般公募で作られた「八つの日の丸の旗」を組み合わせた旧八幡市章碑があり、北九州市八幡東区となった今なお、八幡市時代に思いをはせることも出来る。
せることも出来る。

官営八幡製鐵所発祥の地である『東田地区』では、広大な企業の未利用地を有効活用するため、企業・経済団体・行政が一体となった東田土地区画整理事業が実施され、平成14年（2002）度に完成した。JR九州鹿児島本線の直線化やスペースワールド駅の開業、マルチメディア産業を中心とした新産業分野の誘致、商業・業務施設の充実、利便性に富み、かつ快適性に優れた、人と環境に優しい高品質な都市生活空間の創造、自然史・歴史博物館「いのちのたび博物館」などの文化娯楽施設にいたるまで、その整備内容は多岐にわたっている。平成13年（2001）7月から11月には、『ジャパンエキスポ北九州博覧祭2001』が

この地で開催された。平成 15 年 (2003) 6 月には、国が進める都市再生事業の一環である「環境共生まちづくり」のモデル事業に「八幡東田地区グリーンビレッジ構想」が選定された。平成 30 年度からは「東田ミュージアムパーク実行委員会」が組織され、北九州市東田地区ミュージアムパーク創造事業が実施されてている。北九州市東田ミュージアムパーク創造事業とは、「いのちのたび博物館」を中核として、環境ミュージアム、美術館や世界遺産に認定された官営八幡製鐵所など、各文化施設や商業施設が連携し、集合体（面）としての強みを活かして、観光需要の取り組みや地域の活性化などを目指すもの。

皿倉山から望む八幡地区（写真提供：下瀬氏）

令和 4 年（2022）4 月には、スペースワールド跡地に北九州市科学館（スペース LABO）や大型商業施設等がオープンした。

標高 622m の皿倉山は、山頂から洞海湾と八幡製鉄所を始めとするその周辺の状況を一望できる。また、その夜景は函館・長崎とともに日本新 3 大夜景のひとつとなっている。

河内貯水池

河内貯水池は、八幡製鉄所の工業用水確保を目的として板植（いたびつ）川を堰きとめ 8 年の歳月をかけ昭和 2 年（1927）に竣工、現在も工業用水の供給を続けている。桜公園や藤園やサイクリングロードも整備され、市民のいこいの場である。

明治 34 年（1901）に八幡製鉄所の高炉に火入れされたことを記念して東田第 1 高炉史跡広場に残されているのが 1901 モニュメント。その周りには転炉などの付帯設備も残されている。近代製鉄発祥のシンボルとして平成 8 年(1996) に北九州市の指定文化財となった。

東田第 1 高炉史跡広場

高炉台公園は、近代産業発祥の地と言われる八幡のシンボル。八幡製鉄所の溶鉱炉をイメージしてつくられた高さ約 17㍍の展望台を中心とする自然公園。つつじの名所としても知られる。

くろがね線は、八幡製鉄所の八幡地区と戸畑地区を結ぶために敷設した構内専用鉄道。昭和 5 年（1930）に完成した。開業当初は、戸畑で出来た銑鉄を八幡に輸送し精錬する一方、八幡で出来た砿滓を戸畑に輸送し、戸畑地区拡張のための埋立に使われた。現在は主にスラブやホットコイル等の輸送に使われている。

くろがね線（写真提供：下瀬氏）

起業祭は、明治 34 年（1901）11 月 18 日の官営八幡製鉄所作業開始式を記念して始まった。以来 11 月 17・18・19 日の 3 日間、八幡製鉄所が主催し、地元商店組合等が協力する形で大谷球場及び大谷体育館を中心として盛大に開催されていた。八幡製鉄構内の工場見学等も開催されており、八幡区内の市立小中学校は 18 日が休日となっていた。その後、昭和 60 年（1985）から、地元の各種市民団体や企業等により「まつり企業祭」という名の「市民のまつり」に生まれ変わり、開催時期も 11 月上旬となった。

産土神（うぶすなのかみ） 高見神社

高見神社本殿

洞海湾（現在の東田地区）と製鉄所の産土神として、官営時代からの「ものづくりの精神」を伝える日本近代化産業の守護神、また製鉄所や関連協力会社や産業に関わる企業の社員や家族を守る安全の神とされているのが高見神社。

高見神社は、高見地区の恵み豊かな大自然を守り、荒御霊（あらみたま）を鎮める鎮魂（ちんこん）の神である。参拝に訪れる多くの人々が祈りを捧げる鎮守（ちんじゅ）の神として、北九州の近隣はもとより、遠方の人々からも親しまれている。高見神社は、神話の時代に神功皇后によって祀られたとされる。神功皇后が新羅（しらぎ）、百済（くだら）、高麗（こうらい）の三韓征伐を派遣した際に、戦勝祈願のため洞海湾の小山、大字尾倉字高見（現東田地区）の地に天神皇祖神（あまつかみ）十二柱をお祀りしたのが始まりと伝えられている。

岡（旧遠賀郡）の縣主（あがたぬし）の熊鰐（くまわに）は、神功皇后を山口県豊浦で出迎えた際、船に神籬（ひもろぎ）（神の拠所（よりどころ））を設け、三種の神器を祀り、洞海湾へと導き、帆柱山から師船の材料を切り出して船団を整えた。神功皇后は、守護軍を派遣されるにあたり、洞海湾高見山に高見神社を建立し、戦勝を祈願したと伝えられ以後、高見神社は熊鰐の子孫によって代々祀られて来た。天正14年（1586）には、小早川隆景が豊臣秀吉の西国統下に伴い崇敬篤く武運を祈願したともされている。

『高見大神宮御縁起』や文久3年（1862）建立の鳥居の額束には高見大神宮と称され、洞海湾を取りまく近郷高見神社の本宮として遠賀、鞍手両郡の備米があてられた。社殿の造営には郡代役所より奉幣（ほうべい）（寄付）がなされるようにもなった。

明治29年（1896）の官営八幡製鐵所建設により、高見神社も製鐵所用地となったため、31年（1898）に尾倉の豊山八幡神社の宮前に遷され37年の間、同地に祀られた。この間に官営八幡製鐵所には、高見神社の神威を日本国家の近代化産業の守護神として相応しい神社とするべく、新たに建立する気運が高まった。

現在の高見神社は、昭和8年（1933）の日嗣皇子（ひつぎのみこ）（皇太子）生誕と日本製鐵㈱創立を記念して建立されたもの。高見神社造営大事業は、官営八幡製鐵所と内務省（現在の総務省）共同の国家事業として執り行われた。四季を通じて美しく、官営八幡製鐵所高等官舎がずらりと並んだ高見町は、近代国家の都として京都の条里制をならい整備され、その高台に高見神社が建立されたのだった。

高見神社造営大事業は、渡邊義介八幡製鐵所初代所長を始めとする当時の八幡製鐵所従業員、関係企業の社員、地域、崇敬厚き人々の浄財と奉仕により、10年の歳月を要すものだった。当時植えた樹木は、今や広大な大自然に恵まれた美しい高見の鎮守の杜となっている。

内務省神社局の角南隆技師を始めとする神社建築の名匠たちによる高見神社の設計は、昭和を代表する総檜木流れ造りの御杜殿となり、大自然との調和による美しさを維持しながら、現在も高見神社に縁ある人々の心と歴史を伝えている。近年、高見地区の再開発事業とともに社宅の町なみは大きく変わったが、高見神社と神社をとりまく鎮守の杜は、今でも大切に守られている。

昭和24年（1949）5月の昭和天皇九州巡幸にあたり、福岡県下の旧官幣大社とともに幣帛（へいはく）された高見神社の相殿には、天正時代の初めに東尾倉より遷された若宮社の他、官営八幡製鐵所縁の地の神社も合祀されている。